

# おまけコラム…麻雀漫画小史

「咲☆天」をはじめとして、現在も多く作品がある麻雀漫画というジャンル。このジャンルはこれまで一体どのように変化してきたのか、ここではそれを見ていきましょう。

なお、本項執筆にあたっては、izumick氏の「麻雀漫画30年史」（同人誌「麻雀の未来」「麻雀の未来2」掲載）、「伝説麻雀激牌シリーズ」巻末収録の「麻雀まんが小史」を参考にしております。多謝。

## 70年代

まず、麻雀漫画の歴史はどこから始まったのか。

このあたり、今後の研究によって書き換えられる可能性はあるのですが、69年（阿佐田哲也が週刊大衆に大ヒット小説「麻雀放浪記」を連載し、世間が麻雀ブームに入っていた年です）に、つのだじろうが「プレイコミック」（秋

田書店）11月号に発表した読切「發の罌」が、麻雀漫画第1号であろうと考えられています。「發の罌」は「伝説麻雀激牌シリーズ」1巻に収録されているので、気になる方はそちらをご参照のこと。

そして、「プレイコミック」ではその後、71年に北野英明が阿佐田哲也の小説「牌の魔術師」を漫画化。初の「長編（連載）麻雀漫画」は、おそらくこれではないかと思われます。

その翌年である72年には、後に麻雀漫画をリードすることとなる竹書房が設立され、「近代麻雀」が創刊されました。といっても、この「近代麻雀」は現在の「近代麻雀」とは別物の活字誌であり、このころの竹はまだ麻雀漫画には本格的に手を出していません。

むしろこの時期、麻雀漫画をリードしていたのは秋田書店「プレイコミック」では「牌の魔術師」以降も、北野が阿佐田や野村敏雄の麻雀小説を次々と漫画化、また「漫画ホット」では「セ

イガク打ち」（速水駿十・鳴島生）、「トップコミック」では「雀鬼人別帳」（吉岡道夫十・森義一）と、それぞれの青年誌で麻雀漫画が連載されており、麻雀漫画特集の増刊号が組まれることもしばしばでした。

なお、この3作の作画者（北野・鳴島・森）は70年代麻雀漫画の御三家と言える作家であり、特に北野は超売れっ子、彼が描くだけで数万部は売れたという話で、実際70〜80年代中盤までの麻雀漫画雑誌における北野の表紙率は異常なほどです。

さて、時は少し下って75年。ついにこの年、日本初の麻雀漫画雑誌である「漫画ギャンブルパンチ」が創刊されました。

この背景には、この頃、麻雀ブームの加熱はとどまることを知らなかった（69年の時点で日本国内の雀荘の数は約一六〇〇〇軒でしたが、75年には倍の約三〇〇〇軒となっており、ピークとなる78年には約三六〇〇〇軒に達しました。なお、その後は減少の一途であり、00年で約二〇〇〇軒、現在

大漫研出身のかわぐちかいじ。

今でこそヒットメーカーのかわぐちですが、70年代はヒットに恵まれず、迷走していた漫画家でした。しかし、81年に「近代麻雀オリジナル」で連載が始まったかわぐち初の長編麻雀漫画（読切は70年代にもわずかに描いていますが）「プロ」がヒットしたことで作風を確立し、同作の終了後、84年に連載が始まった「はっぱうやぶれ」とあわせて、80年代麻雀漫画シーンの最重要人物の一人となっています。

当時の「近代麻雀オリジナル」「別冊近代麻雀」という竹書房二誌は、70年代に麻雀漫画を多く執筆していた漫画家（70年代の項目で名前を挙げた三人など）があまり見られなくなっている、上記の二人の他にも、多くの新しい（麻雀漫画の描き手としては新しい）も含む）描き手が登場するようになっていました。

紙幅の都合から個々の漫画家の詳細には触れませんが（気になる方は名前でググって見てください）が、順不同で名前だけでもあげてみましょう。

は一五〇〇〇軒を割っています）にもかかわらず、「近代麻雀」は決して絶好調ではなかったことがあります。

しかしそんな中、梶川良（当時竹の編集者で、後に麻雀漫画原作者としても活躍）の進言で作られた、近代麻雀臨時増刊の麻雀漫画特集号が大好評で、3万部だか5万部だかがあつという間に売り切れたらしいのです。

この成功に気を良くした竹は本格的に漫画雑誌へ手を出すことを決め、12月に「ギャンブルパンチ」を創刊したわけですが（雑誌の号としては76年1月号になります）。竹はその後、77年に「傑作劇画近代麻雀臨時増刊」（現・近代麻雀オリジナル）を、79年に「麻雀劇画」（現・近代麻雀）を創刊。これらが現在へとつながっていきます。

そして、竹の成功を見てか、他社も次々と参入を始めました。

77年には「ギャンブル劇画」（徳間書店　79年）、「劇画オールギャンブル」（廣済堂。のちに壺番館書房　87年）と、「ギャンブル」と名はついてはいるがほぼ麻雀漫画のみが載っている雑誌（なお、このころの雑誌で、

ほんまりう、石川賢、どおくまん、守村大、宮谷一彦、石井隆、福山庸治、佐多みさき、いがらしみきお、笠太郎、園田光慶、芳井一味、上村一夫、たなか亜希夫、田村信、新田たつお、神田たけ志……。現在、麻雀漫画の刊行点数日本一の漫画家となっている嶺岸信明もこの頃のデビューですし、ゲスト読切であれば、つげ忠男などというところまで描いています。

そんな中、83年に、70年代は「農條純一」名義で三流劇画（当時エロ劇画をこう呼んだ）などを描いていた能條純一が、「わたしは雀」（シナリオ協力：関野ひかる　竹書房全2巻）で別近に登場しました。その能條が85年に別近で連載を始めた、「あんた、背中が煤けてるぜ」のセリフで知られる「哭きの竜」は、麻雀漫画の枠を超える大ヒットとなります。本作は麻雀漫画として初めてアニメ化（88〜90年、ガイナックス制作のOVA）され、95年には実写映画化もされました。

「哭きの竜」が登場した85年は、麻雀漫画雑誌バブルと呼ぶべき年でもあ

「漫画ギャンブル王国」（海潮社）、「漫画スーパージャンブル」（東京三世社）などは麻雀漫画誌ではなくギャンブル漫画総合誌です。「劇画ギャンブルエイト」（コミック社）もおそらく総合誌ではないかと（表紙しか見たことがないので憶測ですが……）が創刊され、78年には、「週刊漫画サンデー」の増刊として「傑作麻雀劇画」（実業之日本社　88年）が始まっています。

また、同時期で忘れてはいけない存在なのが桃園書房。雑誌は出さなかったものの、「少林寺雀法」（綾小路綾子　十すぎ弘光　77年）など描きおろしコミックスを多数刊行しました。ちなみに、この桃園麻雀漫画は、基本的に泣きたくなるほどつまらないという特徴があるため、軽い気持ちで手を出すことはおすすしません。

## 80年代

80年代は、麻雀漫画に大変革が起きた10年間で、麻雀漫画界をリードする数多くの才能が生まれた10年間で

ります。

「近代麻雀ゴールド」「麻雀グラフィック」「劇画麻雀王」など、この年だけでおそらく8誌が新たに創刊しており、麻雀漫画雑誌の数は、筆者が確認しているだけで15誌にまで達しました（このあたり、別項29ページもご参照ください）。

「哭きの竜」の影響を考えなくなるころですが、同作の連載スタートは6月、単行本1巻が出るのは翌年であり、この年のうちはそこまで大きな影響力があったとは考えにくいところです。なぜこのような創刊ラッシュとなったのか、84年に映画「麻雀放浪記」がヒットしたことで、片山・かわぐちの作品のヒットが原因ではないかとも思われますが、正確な理由は不明で判然としません（雀荘の業界紙である「麻雀新聞」のバックナンバーを読んだ限りでは、この時期雀荘が特に景気が良かったようにも見えず、本当わかりません）。

また、雑誌こそ発行していなかったものの、グリーンアロー出版（現・

Bont!マガジン）がこのころ積極的に単行本を刊行（徳間書店の「漫画タウン」連載作が主だったよう）しており、「風の雀吾」[志村裕次＋みやぞえ郁雄]などの个性的な作品は今でも評価されています。

そして、このころ、麻雀漫画の原作に大きな変化が起きていました。

これは、シナリオと別に麻雀シーンを考える「闘牌原作」（闘牌協力とも。クレジットが入らないことも多いが、麻雀プロが担当することが多い）が生まれたことが理由として大きいと言えます。このシステムが登場した正確な時期は不明ですが、94年に刊行の「ジャングル」（嶺岸信明）4巻の巻末に、麻雀プロの馬場裕一が「闘牌原作が生まれてから約10年」と書いていることから、80年代前半に生まれたとみられましょう。

この文章を書いた馬場は、「ジャングル」はもちろんのこと、他にも、片山まさゆきの諸作品を始め、「<sup>3</sup>/<sub>4</sub>」「帝王少年」など多くの作品で闘牌を担当しています。

そして、馬場の他にも、魅力のある闘牌を描ける原作者が80年代中盤に二人登場しました。

一人は来賀友志（別名義に注連木賢、五條敏）。「近代麻雀」の編集長を経て劇画原作者となった彼は、初期の長編「あぶれもん」（麻雀漫画ファン以外からの知名度こそ低いものの、雑誌のアンケート順位では「哭きの竜」を抑えて1位だったという超人気作品でした）から完成された作風を持ち、80年代後半から90年代の近代麻雀を支えることになりました。

そしてもう一人は土井泰昭（ペンネームは山根雀治↓山根泰明↓土井と変更）。プロ雀士でもあり、来賀同様「近代麻雀」の編集長出身である彼は、読みを重視した闘牌が特徴的で、原作担当に「勝負師の条件」「幻に賭ける」などがある他、「哭きの竜」の闘牌原作も担当したと言われています。彼らの登場が、90年代、麻雀漫画の黄金時代へとつながっていきます。

## 90年代

とは、皆様ご存知のとおり。また、この年代に竹書房でブレイクした漫画家で外せないのは西原理恵子。

「天」と同じく89年に近代麻雀ワールドで連載が始まった「まあじゃんほうろうき」は、実録系という新たなジャンルを切り開きました。その後のサイバラの活躍、これも言うまでもないでしょう。

そしてもう一つ、88年に連載が始まり、90年代を通して近代麻雀ワールドの看板であった「ジョーイチ」のシリーズも外せません。本作は何度もVシネマ化される人気を得、また、竹書房主催の麻雀最強戦で桜井の弟子が2回連続で優勝したことなどもあり、雀鬼・桜井章一はこのころから麻雀界一つのブランドとして確立します。

96年には、近代麻雀オリジナルで「兎―野性の闘牌―」（伊藤誠）がスタート。これは竹書房では珍しい美麗な絵で人気を博し、休載があまりに多いなどの欠点はありませんものの、アーケードゲームにもなるほどの人気を見せました。

前項のラストで言ったとおり、「黄金時代」と呼べるのが90年代。「麻雀漫画の傑作」といえば、その多くはこの時代からの選出になります。大

西洋平は「タイマン！男魂マンガ高校マンガ地獄変2」（97年）の中で、麻雀漫画について「90年代に入ってからはそのナローな妄想世界は急激に萎縮し、過去のメタファ的的作品や、現実的かつ中庸な麻雀マンガばかりが目立つ（絵はお上手だが）」などと書いていましたが、はつきり言って、90年代の麻雀漫画をほとんど読んでいないか、見る目がまるでないかのどちらか（多分前者）の人間でないと出てこない評価です。

以下、90年代を彩った傑作群の名前をあげていきます。ちなみに、86年にあれだけあった麻雀漫画雑誌はこの時点で竹書房3誌と「麻雀グラフィック」のみになっており、これらの作品は全て竹書房3誌でのものです。

まず王道の作品で「ノーマーク爆牌党」、「てっぺん」、「麻雀蟹気楼」、「幻に賭ける」、「根こそぎフランケン」、「メジャー」、「白」（渋沢さつき）、「ナルミ」

麻雀ギャンブルCOMI」にリニューアルした後休刊。

99年には「近代麻雀オリジナル」が版型変更（10年に戻る）した上再録漫画ばかりが載るようになり、本気で休刊が危ぶまれる事態になりました。

近麻本誌こそ、06年にスタートした「ムタツモ無き改革」（大和田秀樹）というヒット作が生まれたことや、「アカギ」のアニメ化、「打姫オバカミーコ」（片山まさゆき）のドラマ化などの材料はありましたが、近麻系列全体としては斜陽だったことは否めないでしょう。

では竹書房以外ではどうだったかというところ、ナイタイの「V麻雀」、ワニマガジンの「勝ち組麻雀」などがひっそりと出てそのままひっそりと休刊するなど、やはり明るい話は特にありません。唯一、99年に「週刊漫画グラフィック」で連載開始し、現在も続く大河作品「天牌」が気を吐いていました。

そのような中で、「咲-saki-」が登場し、現在に至るわけです。

（山根泰昭＋柳澤一明）など（このあたりに関しては本書巻末もご参照ください）、変化球やギャグ作品でも「トーキョーゲーム」、「ナイトストーン」、「めとろガール」（入江紀子）、「イッパツの女」（桐島いつみ）、「ぶんぶんレジデンス」（坂本タクマ）、「パラダイス・ロスト」（日高トモキチ）など粒ぞろい。「ナイトストーン」とかを読んで「絵が上手なだけの中庸な漫画」と評価できる人がいたら、正直脳を疑いますよ。

さて、90年代の竹書房で、やはり一番大きいのは福本伸行のブレイクでしょう。

80年代はけしうまくない絵で人情物を描いていた福本でしたが、やはり人情物として始まった「天」（89〜02年 近代麻雀ゴールド連載）を途中でシリアスなバトルに転換して大ブレイク。

スピンオフの「アカギ」（92年〜連載中 05年にTVアニメ化）や、麻雀漫画以外でも「カイジ」「銀と金」などもあわせて、一躍ギャンブル漫画界のトップスターへと躍り出ました。

その後現在でも活躍が続いているこ